

KJ法について

概要

日本の文化人類学者川喜田二郎氏（元東京工業大学教授）が考案した創造性開発（または創造的問題解決）の技法で、川喜田氏の頭文字をとって“KJ法”と名付けられています。

何人かが集まり、あるテーマをめぐって、自由奔放に出されたアイデアや意見、または各種の調査の現場から収集された雑多な情報を1枚ずつ小さなカード（紙キレ）に書き込み、それらのカードの中から近い感じのするもの同士を2、3枚ずつ集めてグループ化していき、それらを小グループから中グループ、大グループへと組み立てて図解していきます。こうした作業の中から、テーマの解決に役立つヒントやひらめきを生み出していこうとするものです。

KJ法の基本的な手順

1 カード（ポストイット）づくり — 情報収集のステップ

情報や事実、知識や経験などの情報を、1つ1枚ずつ、ポストイットに書き込んでいきます。この段階を「カードづくり」といいます。

2 グループ構成

1) カード貼り

委員がカード（ポストイット）の内容を説明しながら模造紙に貼っていきます。

2) カードあつめ

近い感じのカードを集めていきます。

※あわてず、ゆっくり2、3枚ずつ。意味合いが違うものは無理にどこかへ入れない。

3) 表札づくり

①カードのグループに「表札（タイトル）」をつける。

②カードの心をソフトでズバリの表現で言い表す。（元の言葉の香りを残す）

③表札は新しいカード（ポストイット）に赤字や青字などで書く

※カードのグループは、まず小グループを作り、次に小グループ同士で中グループを、そして中グループ同士で大グループを作っていきます。

3 空間配置

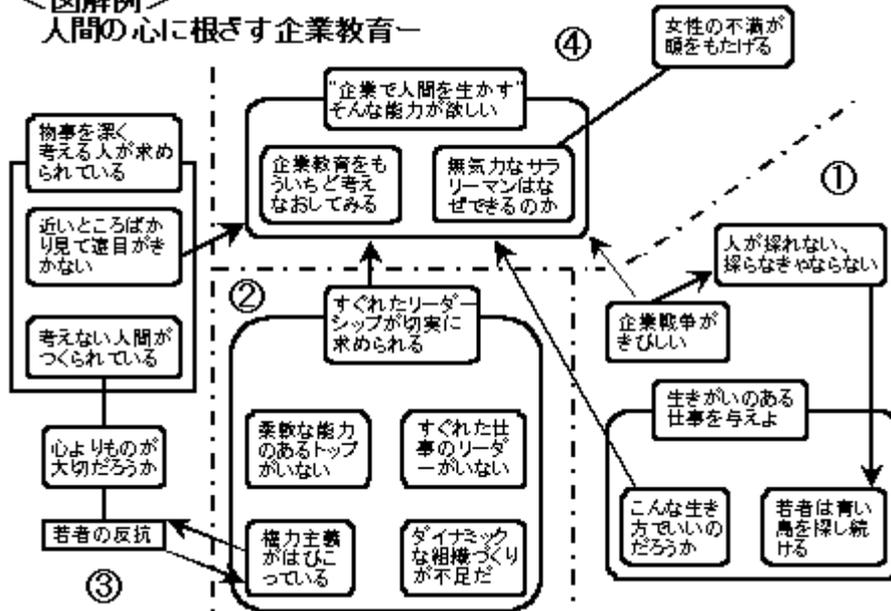
中グループや大グループへと組立てられて、クリップや輪ゴムで束ねられたカードの束を模造紙などの上で空間的に配置をして、姿・形をもったものにしていきます。

4 A型図解

輪どりや棒線などでグループ同士の関係を表示し、全体が姿・形を持った図解となるようにしていきます。

<図解例>

人間の心に根ざす企業教育ー



5 B型文章化

A型図解を元にして論文や記事などに文章化していきます。

■ KJ法は、次のような使い方をすると効果的である。

1. 問題の正体をはっきりしない時。それを明確化する。
2. 問題はもやもやしたままでもよいから、とにかく紙切れに書き出していく。
3. 周辺情報を幅広く収集する。
4. カード化された情報は、バラバラなままディスプレイする。
5. バラバラなカード群の語りかけを素直な気持ちで聞き取っていく。
6. バラバラな情報群の中から、次第に紙切れたちが集まってきて、問題が形成され、構造化されるように思考する。
7. 構造化された問題から解決策を考える。
8. グループで取り組むことによって、衆知結集の効果や、チーム作りの効果を期待できる。